

# チーム活動としてのチームティーチング ーチーム運営を円滑にするための一提案ー

橋爪 真理 (HASHIZUME Mari)

三重県立四日市四郷高等学校

## 要約

2011 年から小学校外国語活動が必修となるが、すでに小学校の約 97 パーセントにおいて英語教育が実施されており、今後どのように小学校の中で実践していくかさまざまな取り組みがなされている。授業の多くは外国人指導助手とのチームティーチングであると報告されており、実践する上での困難、問題点なども多くあげられている。中学校および高等学校での英語教育では、1987 年から JET プログラム（外国青年招致事業）により外国人指導助手が招聘され、チームティーチングが実施されているが、この 24 年間に行われた研究で扱われている事柄は、小学校英語教育がまさに直面している「やりにくさ」と似ているものが多くある。小学校英語についての研究の多くは、教授法や教材、アクティビティーについてなどで、チームで活動するチーム理論の研究が遅れている。チームティーチングは、単独授業とは異なり、複数の人間が授業を担うわけで、それぞれの教師の立場、役割分担、共通理解、意思疎通などを明確にするというような、「チーム」としての運営上の要素が加わってくる。チームティーチングをうまく行うためには、このような単独授業とは異なった形態を十分理解していく必要があり、このことがチームティーチングの「やりにくさ」を解明するひとつの回答になるのではないかと考える。本稿では第一に、チームティーチングの特に「チーム」に焦点をあて、チーム活動という視点から小学校英語教育の直面している問題点を明らかにする。次に、チーム理論を検討し、チーム活動を作り上げている要素を探る。さらに、小学校英語のチームティーチングを概観し、特に ALT と日本人教師という異文化を背景にもつもの同士の人間関係の営みとして捉え、チーム構成員が自分自身に備える必要がある行動様式について考察し、小学校英語教師チームが効果的に機能していくために、チーム活動への具体的な提案を行う。

（キーワード：チームティーチング，チーム理論，チーム活動）

## 1. 現状と問題点

小学校における英語教育は、平成4（1992）年に研究開発校2校で始まり、平成23年には「小学校外国語活動」として必修化されることとなった。これに先立ち教員対象の英語教育として、免許状の取得要件に外国語コミュニケーションの履修が定められたが、これは2000年からの施行のため、大半の小学校の教員は履修せずに英語を教えていることとなる。そのため、英語が専門ではない小学校の教員の多くが、英語活動を行うことについて、大変な不安を持っていることは容易に想像ができる。ベネッセ教育研究開発センター（2006）がおこなった小学校教員に対する質問紙調査によると、「英語教育を行う上で不十分であると感じていること」は、自分の英語力（81.8%）、ALTなどの外部協力者との打ち合わせ（86.1%）、英語教育に関する教員研修（89.5%）、教材開発や準備のための時間（92.7%）と回答している。このことから、英語教育について自信のない教師たちが、英語教育のノウハウを知る機会を十分に与えられず、授業で頼る教材を準備する時間もなく、あげくとともに授業をおこなうパートナーと打ち合わせも満足にできないという、大変困難な状況におかれている様子が浮かび上がってくる。そのため、54.8パーセントの教員が英語教育に負担を感じると回答しており、この結果は猪井（2009）が行った調査でも同じような結果が出ている。授業形態としては、80パーセント以上が外国語指導助手（Assistant Language Teacher、これ以降 ALT）と学級担任（Home Room Teacher、これ以降 HRT）のチームティーチング（Team Teaching、これ以降 TT）で、そのうちの60.1パーセントが、中心となる指導者はALTと回答しており、この結果もまた猪井（2009）、上原・フーゲンブーム（2009）がおこなった調査でもおなじような割合であった。自分の英語力が不十分であると自覚しているHRTが、英語を母語とするALTに、授業における主導権を与えているようだ。次に「特に課題だと感じていること」は、指導する教員の英語力（40.6%）が最も多く、教材の開発や準備のための時間、指導のためのカリキュラム、教員研修、打ち合わせの時間と続くが、これは先の「英語教育で不十分と感じていること」の結果に対応している。身につけたい英語力とは一体どのような英語力なのかについて、猪井（2009）の調査では、「授業に必要なクラスルームイングリッシュ」（92.7%）、「ALTとの打ち合わせができる程度の英語」（68.3%）、上原・フーゲンブーム（2009）の調査では、「ALTとの打ち合わせを行えるようにする」（63.2%）と報告されている。言語は何度も何度も間違えながら習得していくものだ、と言われるが、教師として、それも英語の授業という設定では、よほど英語力に自信がなければ生徒の前ではなかなか英語を使うことはできない。せめて授業前に、ALTとどのような授業展開になるか、打ち合わせを十分とることができれば、自分自身の英語についても準備することができるであろうが、現状では時間がなくできない状態で、HRTの苦悩が推測される。田中（2010）は、英語力に自信のないHRTの実態について、ALTの英語に押しつぶされ萎縮してなにも主張できず、ALTの言いなりになってしまう事実があることを忘れてはいけないと述べており、HRTの英語教育に対する苦闘は、英語の授業運営そのものだけでなく、自分自身の在りようにもかかわる大きな課題となっているようだ。

しかし小学校においては、中学・高等学校よりも、学級担任とこどもたちが日常形

成している授業環境が学習に影響を与えており、教室でのルールもこどもが授業を通して学ぶもののひとつである（黒田，2008）ことを考えると、ALT が中心となって授業をすることについては、学級でのこどもたちの状態をよく観察し、学級担任が果たす役割について、TT のあり方を見据えた上で模索していく必要がある。高等学校、中学校の英語教育においては、1987 年に外国青年招致事業（Japan Exchange and Teaching Program, これ以降 JET プログラム）を中心に TT が本格的に始まったが、教育現場では上記の小学校での状況のように、日本人英語教師（Japanese Teacher of English, これ以降 JTE）が英語を母国語とする ALT の前では、自分の英語力に自信が持てず、本来ならアシスタントである ALT に授業の主導権を任せてしまい、さらに授業以外の業務の多忙化により打ち合わせの時間を十分確保することができず、打ち合わせをせずに授業を行い、その後授業の振り返りすることなしに次に進むという状況が多くみられ、このことが問題としてあげられてきた。なぜなら、ALT は専門的な教育職に関する知識、語学教育に関する知識、および経歴は求められておらず、教育目標の設定、評価、授業運営など、教育職という観点から言うとまったく素人である。そのため、TT においてどのような力を生徒たちにつけるのか、目標・目的・評価をどこに設定して実践するのかなど、教育事情に関して専門である JTE の授業に対するビジョンが、どうしても必要となるからである。そのために、JTE が積極的に関わり、主導的な役割を担って目標、目的を明確に設定していくことが、TT 運営には大切な要素なのである。小学校英語でも、授業において児童生徒の実態や、授業における生徒集団のダイナミクスを考慮して授業を展開しようとする、児童生徒を最もよく知る HRT が中心となって、英語授業を計画し、実践していくことが不可欠であろう。

さらに ALT との TT を、異文化という観点からみると、教育事情について日本と ALT 参加者が多い欧米社会とは異なっている点が多々あり、ALT にとっては大切、あるいは当然であると思われる事象でも、日本人にとっては戸惑いを覚える原因となる場合がある。石田・石田（1999）は、学習指導に対する教師自身の考え方についての国際比較を行い、指導信念が国や文化によって異なっていることを明らかにしている。さらに石田（2003）は、教育目標や教育の役割や機能についてとりあげ、教師自身が抱いている考え方や信念は、意図的にせよ無意図的にせよ、学習指導を規定していき、こうした教育観は、教師個々人が受けてきた教育や、自らの経験によって形成されると述べている。このことより、互いの観点が異なるということを前提にして、違いを明らかにしながら理解していく努力を常に行わないと、誤解などの問題がでてくる可能性があるだろう。そのためには、コミュニケーションが重要な要素となるであろう。

以上、小学校の英語教育の先行研究の調査結果を検討する中で、HRT の英語力またそれに対する思い、TT での ALT と HRT の関わり、TT そのもののあり方が、現在小学校英語の現場が直面している、問題課題として明らかになった。TT について梶田（1997）は、TT をティームとティーチングにわけて考えており、TT の課題について考える際も、ティーム論からのアプローチと、ティーチング論の両面から見る必要があると述べている。TT をおこなうにあたっては、授業の内容、授業の進め方というようにすぐに実践につながるティーチングに注目されてしまうが、実はティームを構成している教師たちのかかわり、役割、ティームそのものの機能について知ることが必要だと考える。

本稿ではこのチームに注目し、小学校の TT における教師チーム（ここでいう教師チームは、前述したように小学校においては、ALT と HRT の協同作業がほとんどであるため、本稿では特に、教師チームを ALT と HRT とする）の理想的なあり方を探るために、以下の 2 つの視点から考えることとする。まず一つ目はマクロの視点から、個人でおこなう活動とは異なったチームが持つユニークな側面を検討するために、チームの成り立ちや要素をチーム論から探り、ALT と HRT の教師チームの構成要素にはどのようなものが必要であるのか考察する。次にミクロの視点として、この教師チームを異文化および異言語を持つもの同士の間関係の営みとして捉え、特にコミュニケーションをとるのが困難なチームが、チームワークを重視しながら TT を実践していくためには、どのような取り組みが考えられるか、先にあげた問題点を検証し、中学・高校での TT での取り組みを参考にしながら、小学校における教師チームがより効果的に機能していくための提案をおこなうこととする。

## 2. チームティーチングにおけるチーム

「チーム」とは複数の人間によって行われる組織形態のことをさすが、教育現場における TT は、「協力教授」の訳語があるように、教師がチームを組んで協力してこどもの指導に当たるとする指導方式のことを意味し、教師自らの得意とする専門分野・領域を受け持ち、弱点は他に頼み互いに分担・協力して指導の効果を高める工夫のために生まれた、指導組織であり経営組織である（新井・天笠，1999）。つまり、TT の成功は HRT と ALT との教師間協力が前提であり、もしその協力がなければ授業は成立しないこととなるので（田地野，2001）、「チームワーク」「チーム構成員の人的結合」「チーム構成員の領域」ということに対して、お互いに十分対応する必要がある。

チームという視点を重視し、チームでの取り組みを関係の開発という側面から捉え、チーム理論を研究しているベックハート(1972)は、チームが新しく形成されたとき、どのチームも持つ特徴として、「役割と関係についての混乱」をあげている。つまり、チームを作り上げる人員は、チームに加えさせるに足る専門技術能力を持っているので、いかにして協同するのか、それぞれの主要な関心ごとは何であるか、チームが生まれた早々に「協力して」調べておけば非常に利益がある、というのだ。黒田（2007）は、HRT の授業への関わり方や子どもの反応が、ALT にどのような影響を与えるかについて、実際の小学 3 年生の授業を観察し検討している。そこで、授業を進める中で、ALT と HRT は、連携のあり方を模索し、それぞれの役割を果たすようになり、結果として「授業を進める ALT」と、「環境を整える HRT」というそれぞれの役割で TT が機能した、ということを報告している。TT におけるそれぞれの役割を深く意識し、TT を実践していくことは、TT を進める上で有益であり重要な要素であろう。

前述したように教師チームは、文化が異なり、また立場も異なる構成員でチーム活動を行うわけで、その中で大切なことは、構成員が自分はチームに関与している、あるいは貢献している、互いに補い合っている、と感じられるような環境と同時に、個人のアイデンティティをチームで作り上げていくことである（Dyer, 1977）。



1で明らかにした問題点の中で、英語力が劣っているということで、萎縮してしまいがちな HRT について取り上げたが、この点について田中(2010)は、日本における精神的な、あるいは英語母語話者信仰というような「英語支配」が、小学校英語教育にどのような影響を及ぼしているかを研究し、その上で小学校教員は、こどもの発達状況に応じた指導をしており、クラス運営では豊富な技能、知識を持っているので、自信を失ってはいけない、と述べている。チーム活動を成り立たせていくために、構成員それぞれが自分の特性を生かす明確な役割をもち、その役割を意識して責任を持ち、自分の持つ技術を十二分に生かしていく営みこそが、大切であるということになる。

Beckhard (1972)は数多くのチーム活動に関与し、そこからチームの基本的要素を以下のようにあげている。

- Setting goals or priority (Goal)
- The work (Role)
- The way the group works (Procedure)
- Relationships within the group (Interaction or relationship)

これは GRPI モデルと呼ばれ、チームがより効果的に活動していくための4つの要素をあらわしている。このモデルの4つの要素、Goal：目標・目的、Role：役割、Procedure：過程、Interaction：関係性、を参考にして、小学校英語における問題点を考察しながら、ALTとHRTの教師チームが、効果的に機能するための要素を検討する。

### 3. チームの目標・目的

1の現状と問題で明らかにしたように、小学校教員の望む研修内容の9割以上が、「授業に必要な英会話・クラスルームイングリッシュ」で、「英語活動の目的」についてはわずか24.4パーセントであった(猪井, 2009)。英語力に自信のない教師たちは、直接的に関わる内容の研修を望む傾向にあり、文部科学省(2008)が示した英語活動の目標「コミュニケーション能力の育成」そのものについての取り組みが、遅れているようである。このことは、中学教育との連携という観点からも重要な点で、対策を立てていくことが必要だと思われる。中学・高等学校でのJETプログラムにおいても、その設立から具体的な達成目的や目標が明確に示されず、また教育現場である学校においても、訳読および文法中心の大学入試を中心課題においた英語教育にはそぐわない内容であったため、現場に混乱を引き起こしてきた。

しかし一般にチームは、チーム全体としてなすべき作業の内容や到達目標が、チーム員に明確になっており、チーム員の作業結果が、チーム全体による協同の成果として現れるものであることを必要とする(大橋・竹林, 2003)。チームがもつ独自の特徴を、数々の事例を検討することから示した McGregor (1960)も、成功するチームには、統一された目的があるとしており、ベックハード(1972)は、効率的な組織の定義として第一に、目標の設定と目標に向けての個々の努力の必要性をあげて

いる。目標が明確であれば、チームの中で葛藤があっても、それは避けられない条件であり、取り組む必要のある問題であるとして、チーム内で考えることができる。葛藤を隠したり避けたりするような、無駄なエネルギーを使うことがなくなるというのだ。山本（2009）は、小学校英語教育における諸概念の曖昧さをとりあげ、概念的な理解を試みているが、結論として、担任教諭がどのような授業を「行いたいのか」、が肝心であるとしている。

以上のことより、TT においては特に、HRT である日本人教師が中心となって目標を明確に設定し、ALT と HRT がその目標に向かって貢献していくことが、求められる要素といえるであろう。

#### 4. 役割

Beckhard (1972) は、GRPI モデルの要素として第 1 に目標を、第 2 に役割をあげている。そうして早い時期にこの 2 つの視点を明確にしておくだけで、チームの活動にかなり差が出てくると述べている。たとえば、授業を進める ALT と環境を整える HRT という風に役割を決めることにより、TT がよりよく機能するようになるということだ。黒田（2007）は、実際の小学校での授業を観察し、ALT と HRT がこどもとの互いのかかわり方を見ながら、TT の関係性を工夫していき、両者の授業についての進め方、授業の中で果たしてほしい役割を明確化したことによって、連携が円滑にいくようになった、と報告している。HRT は、教育において専門的な知識を持ち合わせ、学校事情に精通し、指導に関しては、こどもの発達状況や趣味・趣向・悩みなどを始め、どのようにしたらクラスをうまくまとめることができるかなど、一般的な指導技術に関しては、ALT や英語支援の教員にはまったく及ばない、豊富な知識と技能を持っている。大谷（2007）は、ALT に対して、日本の教育制度や学校文化、あるいは HRT とのコミュニケーションについて、質問紙を使って回答を求めた。その中で「なにをしていいかわからない」「自分の役割が明確ではない」という、役割の不明確さに関する不満がよく聞かれると報告し、その調査結果から、ALT が赴任したときの打ち合わせでは、具体例を示しながら説明することが重要である、と提言している。チームで活動を行うときは、構成員がチームの中でどういう役割を担うのか、ということが明確に示されなければ、構成員は何をすればよいかかわからず、作業能率も落ちるであろう。

TT においては、個々の役割を明確にしていくことが、実践していく上で、大切な要素であるといえるであろう。

#### 5. よりよく機能するチームになるための過程

真に効果的な組織においては、大半の労力は仕事の実行と進歩に使われ、人的組織を維持することのためにはほとんど使われない (Beckhard, 1972)。しかしチームが作られてすぐには、効果的には機能することはできないだろう。なぜなら、構成員同士が理解し、相互依存しあうには、お互いに関係しあい、その過程の中で互いに知り合い、信頼を築いていく必要があり、それには時間がかかるからである。

ベックハード(1972)はまた、「ティーム」がうまく機能していくために、「面接」、「情報交換」、「措置計画」という手順の重要性を指摘している。つまり、ティームのメンバーが話し合い、相手の考えていることや目的を知り、自分の考えを伝え、そのうえで計画を立てていくという一連の過程こそが、人間関係を築いていくということである。大谷(2007)は、ALTと円滑にTTの仕事を進めている教員から、短くても自分の英語教育に対する思い、特にALTに対して望むことを含めたオリエンテーションを持つようにしている、という意見が出されたことを紹介している。時間を共有し、お互いの考えを伝え合い、たとえそれが短い時間であろうが、絶えずコミュニケーションにつとめ、お互いの立場を理解し、尊重するその過程が、信頼や協力関係を築いていくのである。この、関係を築き上げる過程は、英語能力に不安のあるHRTには難しく感じられるかもしれない。しかし、だからこそ、授業のみならずティーム活動にとっても、互いがかかわり、協同で実践していくその取り組みこそが、TTをより良くしていく要素だと強く自覚し、努力することが大切であると考ええる。

## 6. 関係性

中学・高等学校では、常駐校がきまっているALTがほとんどで、一般の教員と同じように朝出勤して、夕方帰宅する勤務形態であるが、小学校の場合は、ALTの来校が週1回以上10パーセント、月1回が最も多く22.1パーセントとなっている(ベネッセ教育研究開発センター、2006)。そのような限られた時間の中で、関係性を作り上げるのは、難しい面があろう。しかし、ALTもこどもたちの教育にかかわる同じ仲間である。ALTの学校での様子に関する質問紙調査で、ALTが職場での人間関係をどう認識しているか、ということとTT活動とが、強く関係しているという結果が出た(橋爪、2010)。ALTがTTのパートナーに最も求めていることは、お互いに協力し、協同しながら互いにかかわりあってTTを作り上げていく、というような、互いの関係性なのである。言葉の違い、文化の違いがあるが、ALTにとって互いの違いは当たり前のことで、互いの違いを問題視しない。逆に、TTにおいて互いに協力し、かかわりにあいながら作り上げていくという協同作業の側面に最も関心があるのだ。英語能力や時間のなさで、ALTとの人間関係を構築することは、難しく感じてしまうであろうが、教師自身が楽しんで、人間関係を構築する努力を続けることが、ティームにとって重要な要素であろう。

## 7. 異文化理解

小学校におけるTTにおいて、異文化に関する問題は、ALTとHRTが所属しているそれぞれの国、学校組織、社会に関する文化の理解と、さらにHRTと子どもたちが作り上げるクラスの文化の理解と、大きく2つの視点から考える必要があるであろう。1の「現状と問題点」でも述べたように、自分が過ごしてきた文化の中ではぐくまれた教育観に教師は支配されている。ティーム活動を行っていくには、お互いの教育観の違い、視点の違いを丁寧に知らせあうことが、ティーム活動の進展に効果をなす。築道(2006)は、これからの英語教員に求められる資質および力のひとつに、「異文化に

対する柔軟性」という観点が含まれることを指摘している。このことは、TTにおけるHRTに対しても言えることであろう。ALTは日本にいたることそのものが、異文化への適応を要求されていると同様で、だからこそ、HRTが、ALTが抱えている異文化接触についてさらに理解をし、柔軟な姿勢をとっていくことは、両者の関係性を発展させていくことにつながるであろう。そして、HRTが作り上げている学級文化を、よりよくALTに伝えることにより、こどもたちとALTとの関係性も進展していくであろう。異文化理解は、TTの大切な要素であるといえよう。

## 8. 提案およびまとめ

以上、小学校英語の現状を検討し、ALTとHRTのTTにおける問題点を明らかにしたうえで、チームが持つ独自性、構成員の人間関係、チームに必要な構成要素を検討し、小学校英語のTTを効果的にする要素を検討した。そこで以下のことを、有用な知見であると考え、提案とする。

1. TTは教員同士が協力し、チームで活動する営みであるため、「チームワーク」「チーム構成員の人的結合」「チーム構成員の果たす領域」ということが大切な要素であることを、ALTとHRTは強く自覚し、よりよきものになるよう努めていく。
2. HRTが中心となって英語教育の目標を明確に設定し、ALTとHRTは、その目標に向かって貢献していく。
3. 個々の役割を明確にし、(たとえば、「クラス環境を整えるHRT」「授業をすすめるALT」など)ALTが赴任したときの打ち合わせでは、具体例を示しながら説明する。
4. ALTとHRTの関係性を築き上げていく過程そのものが、チーム活動を発展させる要素だと自覚し、たとえ短い時間であろうが、絶えずコミュニケーションにつとめ、お互いの立場を理解し、尊重する姿勢を持ち続ける。
5. ALTとHRTが、互いの持つ文化を理解することに努め、柔軟に対応していくと同時に、HRTはクラス文化をALTに知らせ、理解を促す。

以上5項目を提案としたが、HRTが最も不安に思い、なんとか身につけたいと希望している英語力については個人の努力にゆだねることとなる。そこで、限られた時間の中で、自分たちのTT実践をお互いがどのように感じながら実践しているか、チーム活動に必要な「目的」「役割」「協力していく過程」「お互いの関係性」「異文化理解」について、ALTとHRTはどう認識しながらTTを行ったか、ふりかえり、反省し、その時々でのチームでの取り組み状態を診断し、次回のTTに向けて改善策を検討するための資料となるふりかえりシートを、本研究で得た知見をもとに作成した(付録)。このシートを使うことにより、言語的困難はあろうとも、意思疎通が少しはできるのではないかと期待する。今後は、さらに一年間の取り組みを互いの共通理解とできるような、その学期ごとの取り組みや、留意事項などがわかるような、年間取り組み表の開発など行い、小学校英語のTT発展に、少なからず貢献していきたいと考えている。



## 引用文献

- 新井郁男・天笠茂（編）（1999）「“TT 教員” の登場とその存在意識」『ティームティーチング辞典』（pp. 42-43）東京：教育出版。
- ベックハート, R. 高橋達男・鈴木博（訳）（1972）『組織づくりの戦略とモデル』東京：産業能率短期大学出版社。
- Beckhard, R. (1972). Optimizing team-building efforts. *Journal of Contemporary Business*, 5, 23-32.
- ベネッセ教育研究開発センター（2006）『第 1 回小学校英語に関する基本調査（教員調査）』東京：ベネッセコーポレーション。
- Dyer, W. (1977). *Team building: Issues and alternatives*. Reading, MA: Addison-Wesley Publishing Company.
- 橋爪真理（2010）「チームティーチングにおける構成員のティーム認知の比較検討」『STEP BULLETIN』Vol. 22, 239-255.
- 石田裕久（2003）「教師の指導理念と授業」津村俊充・石田裕久（編）『ファシリテーター・トレーニング 自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ』（pp. 52-55）京都：ナカニシヤ出版。
- 石田裕久・石田勢津子（1999）『オーストラリアの小学校—総合学習・学校生活・地域社会—』東京：揺籃社。
- 猪井新一（2009）「英語活動に関する小学校教員の意識調査」『茨城大学教育実践研究』28, 49-63.
- 梶田叡一（監修）浅田匡・古川治（編）（1997）『これからのティーム・ティーチング』東京：東京書籍。
- 黒田真由美（2007）「小学校におけるティーム・ティーチングの変容」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 53 号, 194-205.
- 黒田真由美（2008）「小学校英語における学び—「ズレ」とその解消に注目して—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 54 号, 125-137.
- McGregor, D. (1960). *The human side of enterprise*. New York, NY: McGraw-Hill.
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社。
- 大橋昭一・竹林浩志（編）（2003）「チーム性組織の特徴」『現代のチーム制—理論と役割』（pp. 8-10）東京：同文館出版。
- 大谷みどり（2007）「外国人指導助手（ALT）と日本の学校文化—日本人教師と ALT 間における文化的要因」『島根大学教育学部紀要』第 41 巻, 105-112.
- 田地野彰（2001）「コミュニケーション能力の育成を目指した英語指導」『広島修道大学紀要』第 42 巻第 2 号, 1-19.
- 田中真紀子（2010）「小学校英語教育における『英語支配』と『英語母語話者信仰』」『神田外国語大学紀要』第 22 号, 1-29.
- 築道明（2006）「英語教員に求められる異文化理解にかかわる資質・能力—Team Teaching における諸問題を基にして—」『日本教科教育学会誌』第 29 巻第 1 号,

1-10.

上原景子・フーゲンブーム, R. (2009)「『日本人教師』と『英語を母語とする ALT』とのティーム・ティーチング：異言語間・異文化間の意思疎通における課題」『群馬大学教育学実践研究』第 26 号, 77-88.

山本卓 (2009)「この授業は何を目指すのか？小学校英語教育におけるあいまい性の問題」『金沢大学外国語教育フォーラム』3 号, 49-63.

## 付録

### 教師ティーム振り返りシート

ここでは、これまで検討した TT に必要な要素をおよびティームモデルを基礎として、ティームの状態を把握できるふりかえりシートを作成することとする。

名称：「ティームティーチングふりかえりシート」

目的：教師ティームの TT 実践を把握し、ティーム員の共通理解を深める。

構成：TT における ALT, HRT それぞれの取り組みを把握するため、教師ティームの現状およびティームの 5 要素にかかわる質問 4 項目をそれぞれ作成し、24 項目の質問紙とする。各質問の回答は、5 スケールとした。

ねらい：●ティームの TT を把握する。●教師ティームがその調査時にどのような状態であるか知る。●自分自身が、今ティームについて感じていること、考えていることに気づき、パートナーが感じていること、考えていることを知る。●ティームの強い部分（うまく機能している部分）、弱い部分（うまく機能していない部分）に気づく。

方法：●ティームの活動中、ティーム活動にやりにくさが生じているような時などに実施する。●各自が調査用紙に回答をする。●回答した調査用紙の 6 つの項目をそれぞれ合計し、合計得点によりその項目の状態を把握する。機会を設けて、さらに考えを明確にし、相互理解を深める機会を設けることが望ましい。

### ティームティーチングふりかえりシート

調査日時 年 月 日

このシートはティームの状態を把握するためのシートです。質問項目は 6 つあり、それぞれに 4 つの質問があります。各質問に 1 から 5 のスケールがあり、質問項目にあてはまる場合は 5、ややあてはまるは 4、どちらでもないは 3、ややあてはまらないは 2、あてはまらないは 1 に丸を振ってください。

This sheet is designed to overview the condition of the team. There are six categories and each category has 4 questions. You can score 1 to 5 based on this scale. 1 being not at all, 2 being not very well, 3 being average, 4 being for the most part, 5 being to a great extent.

Please circle your answer.

ねらい：自分自身が今ティームについて感じていること、考えていることに気づき、パートナーが感じていること、考えていることを知る。

Purpose: To evaluate how each teacher feels about the lesson and to know the partner's thought.

## I. ティームの現状 Condition of the team

- |  |   |   |   |   |   |
|--|---|---|---|---|---|
| 1. あなたは TT を楽しんでいる。<br>You enjoy your team teaching.   | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. あなたの（英語・日本語）は仕事をするにあたって十分である。<br>Your understanding of (English/Japanese) is adequate enough<br>to complete your job. | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. あなたは授業準備のための時間が十分ある。<br>You have adequate time to prepare for the lesson.   | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. TT はこどもの積極的にコミュニケーションを図ろうとする<br>態度を育成している。<br>TT nurtures students' positive attitude to communicate<br>in English.   | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
- TOTAL SCORE \_\_\_\_\_

## II. 総合力 Integration

- |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|
| 1. 適切なときに適切な人がリーダーシップを取っている。<br>Leadership is appointed according to each lesson's focus.           | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. お互いに心を開いて話し合い、信頼している。<br>Each teacher is open-minded and trusts each other.                      | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 問題が起これば、ティーム員で一緒に解決する。<br>If a problem arises, the team makes an effort to solve it<br>together. | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. あなたの意見、アイデアは尊重されている。<br>Your idea and opinion are respected.                                     | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
- TOTAL SCORE \_\_\_\_\_

## III. 話し合い Discussion

- |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|
| 1. 授業後振り返りをしている。<br>T.T. is given proper feed back after the lesson.  | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. TT のメンバーは成功、失敗という言葉の共通のイメージを持つ。<br>The idea of success and failure is the similar among teachers.        | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 自分の努力を振り返り、パートナーとそれを分かち合っている。<br>You review your effort and share it with your partner.                  | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 授業で気づいたことは、話し合われている。<br>Observation during the class about the students are<br>discussed among teachers. | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
- TOTAL SCORE \_\_\_\_\_

## IV. 目標と意欲 Object and motivation

- |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|
| 1. あなたは、エネルギーとやる気と気力を持って TT をしている。<br>You are doing T.T. with energy and positive attitude.   | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. あなたは十分参加しており、貢献が求められている。<br>Your participation and contribution are welcomed in the class. | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. パートナーのスタイルに合わせて柔軟に対応している。<br>You are flexible with your partner's teaching style.          | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 目標は明確でメンバーに支持されている。  | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

The objects are clear and supported by members.

TOTAL SCORE \_\_\_\_

#### V. 役割意識 Role

1. あなたは、教室での自分の役割を知っている。

5 4 3 2 1

You know your own role in the class.

2. 個々の役割は議論によって決められる。

5 4 3 2 1

Your role is discussed with your partner.

3. あなたは自分の役割を的確に責任を持って果たしている。

5 4 3 2 1

You are executing your role properly and responsibly.

4. あなたはパートナーとかかわりあっている。

5 4 3 2 1

You often interact with your partner.

#### VI. 文化 Culture

TOTAL SCORE \_\_\_\_

1. それぞれのメンバーの文化は最大限に尊重されている。

Your background culture is accepted in the class.

5 4 3 2 1

2. 他の国の文化に大変興味がある。

You are very interested in other countries' culture.

5 4 3 2 1

3. お互い進んで相手を知ろうとしている。

Each teacher is willing to understand each other.

5 4 3 2 1

4. 考え方の違いは歓迎され、多様性は奨励されている。

Differences in opinion and diversity are encouraged.

5 4 3 2 1

TOTAL SCORE \_\_\_\_

### 教師ティームティーム総点

